

---

**インフィニットストラトス**      **忍ぶ臆病者**

学生逃避

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

インフィニットストラトス 忍ぶ臆病者

### 【Nコード】

N6264Y

### 【作者名】

学生逃避

### 【あらすじ】

ISを使えることから、半ば強制的に入学させられた男、織斑一夏。幼馴染の篠ノ乃箒と再会し、数カ月が立ち四組に転入生が来るというニュースが舞い込んできた。その転入生は一夏や箒がよく知る人物だった。

処女作品なので、下手です。それでもよろしかったら、どうぞよろしくお願いします。

## プロローグ(前書き)

短いですがおよろしく願います!!

## プロローグ

インフィニットストラトス、通称IS。現在存在している兵器をはるかに超える戦闘能力を誇る。

しかし、これには一つ欠点がある。

それは、女性にしか使えないこと。

これにより世界は、女尊男卑が当たり前の世界に変わった。そして、ある男もISによって変わったのだ。

???視点

「本当にいいんだな」

「ああ、構わないさ」

俺は、目の前にいる男にそう言うと、男は心配そうな表情をしながら椅子に座る。

「なら良いんだが、あいつらは納得してないぞ。今も騒いでるんじ

やないか？」

確かに納得しないだろうが、もう決めたことだ。変えるつもりはないし、それに最後にはわかってくれるはずだ。

…多分、…おそらく、………うん。

「まあ、あいつらのことだから襲ってでも止めに来ると思うが、私が話しておこう。行って来い」

そして、俺は向かう。場所は……

IS学園。

## プロローグ（後書き）

…短い!!

短すぎますね（泣）

ですが、今後ともよろしくお願いします。

## 1 翼（前書き）

連続投稿です。少しは話を作っているので早く出せればいいな、  
思っています。

では、よろしくお願いします。

## 1 翼

男はある建物の前にいた。そこはIS学園。しかし、ISは女性にしか使えないため必然と女子校となっていたのだが、あるニューズが世界に配信された。世界で唯一ISを使える男が現れた。その男の名は、織斑一夏。しかし、今此処に三人目の男が学園の門を潜る。

一方、世界で初めてISを動かした一夏は自分の姉であり、担任である織斑千冬の授業を受け終えていた。授業内容は、二組とのISの実戦訓練。そして今はIS訓練機の片づけをしていた。

### 一夏視点

「ふう、これで終わりですか？山田先生？」

「はい、お疲れ様です。織斑君」



俺に劣いの言葉を言っているのは、一組の副担任の山田先生。いつもあわただしく子供っぽい先生だが今回の訓練で国家代表候補生を二人同時に倒してしまう実力を持つ人。戦闘のときのように普段もしっかりしてればイイのに、神様もひどいよな。

「織斑君？どうしましたか？」

「いいえ！何にも！」

いけねな。山田先生が心配して顔を覗き込んで来て、その際に豊満な胸が揺れるわけで。

「お、織斑君！お、男の子だから仕方ないかもしれませんが。あまり見ないでほしいんですけど」

「あ！その〜。す、すみません」

そして、気まずい空気と沈黙が漂う。まずい、話題を変えなければ！

「そう言えば、朝にほかの組にも転入生がいるって話があってんですけど、先生は何か知りませんか？」

「あ、はい。確かに四組に転入生が来るといことなんですけど、  
- - -」

「ですけど？」

「まだ来てないんですよ。連絡もなくて」

不安そうな顔をしながらいう山田先生。確かに心配だな。

「でも、織斑先生は『あいつのことだから心配しても無駄だ』なんて言っているんですよ」

千冬姉がそんなことを。それに『あいつ』って一体？

「山田先生」

「あ、織斑先生。どうしたんですか？」

なんてことを考えていたら千冬姉が現れた。いつの間になっていたんだ。

「例の転入生が来たんでな、私がそいつの世話をしなければならな  
いんだ。だから、午後の授業は私の代わりに頼みたいんだが」

「あ、やっと来たんですか！いやー心配してたんですよ」

「千冬姉転入生っつい……」

スパーーーーーン！！

「織斑先生だ、バカ者」

清々しいぐらいの叩き方ですけど千冬姉、今何万もの脳細胞が死んだぞ。少しは加減をしてほしいぜ。

「何やっているんですか、千冬さん」

ふと千冬姉の後ろから男の声が聞こえた。え、男？

「お、織斑先生。後ろにいる男の子は一体？」

「こいつが、転入生だ」

「「えっ」」

「はい、そうです」

そう言った男は黒髪が目隠すぐらいの長さで、身長は俺よりも少し低いぐらいで華奢な体つきをしている。そして、なんだか懐かしい感じがする。

「久しぶりだな、一夏」

「え、何で俺の名前を？」

「何だ、忘れたのか？薄情な奴だな」

なんか呆れられているみたいだけど、って千冬姉もため息つかないでくれよ。

「あの、どなた様ですか？」

「仕方ないな。おい、答えてやれ」

「はいはい、わかりましたよ。千冬さん」

おい！そんなことを言ったら千冬姉の鉄拳制裁が……、  
つてるそばから！！

サッ！！

え、避けた？

「おっかないですよ。千冬さん？いや、織斑先生って言った方がいいですか？」

「初めからそう言え」

バカ者、と小言を言う。

「お前今何やったんで」

「え、普通に避けただけだけど」

何サラツと言っているんだよ！あの千冬姉の出席簿を避けるなんて、

「人間技じゃない」

「それは遠まわしに人間じゃないって言ってるよな」

あれ？なんかorzになっているんだけど。

「織斑、こいつは打たれ弱いんだ。あまり気にするな」

「わ、わかりました」

「ええ!!! いいんですか?!」

山田先生がおろおろしながら言う。そんなことよりも

「すまないが名前まだ聞いていないんだが」

「落ち込んでる人に慰めの言葉も言わないとは、貴様は鬼か!!!」  
ああ、鬼の弟か」

ドスッ!!!!!!

ああ、今度は当たった。



「鬼とは誰のことだ？ぜひ教えてほしいものだな」

「すみません！だから、今振り上げている出席簿の下げてください！俺まだ死にたくない！！」

必死になるよな。俺だって死ぬんじゃないかって思うことあるからな。

「じゃあ、さっさと自己紹介しますか」

頭を掻きながら男がこちらを向く。

「本日からここでお世話になる黒翼こくよく斑鳩いかるだ。よろしく！」

## 1 翼（後書き）

……変じゃないでしょうか？

それが一番の不安です。

お駒がしいようです、感想をいただけるのなら、お願いします。

## 2翼（前書き）

今回は不安です。

大丈夫でしょうか？

## 2翼

- - - 六年前 - - -

「一夏、元気だね」

「斑鳩こそ、またいじめられるんじゃないぞ！」

気弱そうな少年、斑鳩を心配する一夏。新しい場所で大丈夫なのか心配していた。

「大丈夫だよ。そんなに心配しないでよ、一夏」

「お前は弱いからな、何かあったら連絡しろよな！俺がすぐに行くから！」

「…それは篝ちゃんに言ってほしかったな」

斑鳩は一夏に聞こえないように言う。斑鳩は箒が一夏のこと好きだと知っていた。

知った時は驚き、そして自分のことのように喜んだ。だから、箒の恋が成就するように協力していたのだ。

しかし、箒はISの関係で一夏たちに何も言わず去ってしまった。

「斑鳩ー、そろそろ行くぞ」

「わかってるよ。じゃあね、一夏」

「おう、いつか会おうぜ!」

そして、斑鳩は一夏たちとの思い出の地去った。

斑鳩視点

「お前あの斑鳩か!？」

「あのって何だあのって」

全く失礼だぜ一夏。いくら俺が昔弱虫だったからって言うていいことと悪いことがあるだろう。

しかし、俺も鬼じゃないから許してやろつ。

「千冬姉聞いてないぜ!斑鳩が来るなんて!」

ドカツ!!

「何度言わせるんだ」

「うわぁ、千冬さんマジ千冬さん。相変わらずの鬼のふじたのふじたに怖いな。」



.....

「いやあ、変わってないな」

なんだか視線が集まっているような気がするんだよ。

まあ、男が此処にいてなんておかしいしな。一夏は気にせず話しかけているので、俺も視線を気にしながらも話を聞いている。

「斑鳩は変わったな。お前もISを動かしたのか？」

「ああ、さらに専用機も有るのさ」

俺は腰に鎖の付いた懐中時計を一夏に見せる。色は灰色で鳥の絵が描かれている。



「ヘー、ならあとで模擬戦しようぜ」

「いいが俺は強いぞ。瞬殺しちまうぜ」

「負けないぜ！」

こんな会話をしながら俺達は屋上に向かっている。

なぜかと言うと筧が昼飯と一緒に食べようと一夏を誘ったらしい。  
十中八九二人つきりで食べたいと見た俺は断ろうしたが・・・

「大丈夫だって！みんないいやつだから」

と言うし、わかってないよこいつおそらく。ほかの女性も誘った  
のだろう。

全く変わっていないね。筧がかわいそうだな。

「一夏」

「何だ？」

「予言してやる。いつか箒に背中を刺されるってな」

「は？どういう意味？」

なぜわからないんだ、このバカは。

「やはり、お前は少し変わった方がよかったよ」

「??？」

そんなくだらない話をしている内に屋上に続く扉の前に着いた。

「しかし、屋上が開放されているなんてな」

「まあ、珍しいって言ったら珍しいよな」

そして、いざ扉を開ける時に俺は一夏をいじるアイデアが浮かんだ。一夏、待ってるよ。

その時の顔はきつと悪い顔だったろう。

.....

..... 第一視点 .....

私、篠ノ之篤は今機嫌が悪い。その原因は一夏なのだ。二人つきりて昼食を食べようと誘ったのだがあいつは他にセシリアや鈴、デ

ユノアを誘ったのだ！全く！せつかく二人つきりになれると思ったのだが一夏め！あとで居合切りの練習台にしてやる！

「あら、箒さんどうかしたしたか？なんだかご機嫌斜めのようにですけども」

「そんなに眉間にシワを寄せていると老けるわよ、箒」

クツ！こいつら、私を心配しているが顔がにやけている！一夏、お前は微塵切り決定だ！！

トントントン！

？ん、何だ？

「篠ノ之さん、ごめんね、本当は一夏と二人つきりで食べたかったんだよね？」（小声）

「い、いや！そんなことはありません！！」

「クス、そういうことにしておくよ」

「それにしても一夏さん遅いですわね」

「何か山田先生と訓練機を片付けているみたいだけど」

それにしても遅い。ま、まさか、私の約束を忘れてほかの女子と  
なにかやっているんじゃないか!?

「一夏さん、大丈夫でしょうか!」

「大丈夫でしょう。あの馬鹿を心配しても無駄よ」

「あら、鈴さん。他人を心配するのは普通のことだと思いますわ」

そして、睨み合う二人。背景に炎が似合いそうな雰囲気が続いて  
いるとなにやら話声が聞こえてきた。

この声は一夏の声だ!ん?待てよ。一夏は誰と話しているのだ。

此処はIS学園。つまり女性しかない。話しているのは必然的に女性になる。

「「「一夏(さん)!!」「」」

さっきの雰囲気はどこにダストシユートしたのか、三人がシンク口した。そして一夏が屋上に現れ問い詰めた。

「一夏、いつまで待たせるのだ!それにさっきまで話していたのは誰だ!!」

「お、箒。実は斑鳩が来たんだよ」

「斑鳩?どこにいるのだ?」

「なに言っているんだよ。俺の後ろに……あれ?」

「誰もいないではないか。あれ?では誰と話していたのだ?」

そう言いながら一夏に近づいたとき

「うわぁー!!」

「箒!つてうわぁ!」

後ろから誰かに押され体勢を崩し一夏もろとも倒れてしまった。

「痛たた」

「大丈夫か?箒」

「ああ、大丈夫……」

そういいかけた時私は今自分がどのような状態なのか知った。私が一夏に覆いかぶさるようにつまり、押し倒すような体勢になっていた。

「ッ!!」

「おい、尊？」

ち、近いぞー！一夏！し、しかしこの状態はいいかも知れない。これで一夏が少しでも意識するなら！

.....ここから尊の妄想.....

「なあ、尊」

「い、一夏！？そ、その・・・ち、近い・・・の、だが」



「いいじゃないか。俺は箒が好きなんだから」

そう言いながら一夏は箒に近づいてくる。

「私もす、好きだが・・・こ、こんな人いつ来るかわからない所で」

といいながら心の中ではドンと来い！と構えている箒であった。

「いいじゃないか。俺はもう我慢出来ないんだ!!」

「い、一夏!!」

そして、二人の唇が少しずつ近づいていった。

.....妄想終了.....

「フ、フフフフ。し、仕方ない。なら私が最後まで相手になってやる。私に任せろ!!」

「あー、箒？涎が出ているんだが」

「…………ハッ！しまった。何を不埒なことを考えているんだ。まだまだ修業が足りないみたいだ。」

「おーい、箒」

「な、何だ！一夏」

少し声が大きくなってしまった。お、落ち着け篠ノ之箒。慌ててはいけない。

し、しかし少しは期待していいよな。

「そろそろどいてくれないか？重くて」

「・・・」

「箒？」

「フン！」

ドカッ  
！！！！

「グヘッ！？」

期待した私が馬鹿だった。この朴念仁がそんなことをするわけがないな。

「・・・プッ」

「ッ！？」

誰かに笑われたような気がした。しかし、セシリアや鈴はそんな様子も無い。

デュノアも例外ではない。けれどもここには他に人はいない。

「筈、探しても無駄だよ。今は光学迷彩が起動しているから」

「だ、誰だ！」

「さつき一夏が言ってたじゃないか。俺が来ているって」

さつき一夏が言ってた？・・・アッ！

「斑鳩か!？」

「ハイ、正解だよ。よく出来ました」

そして、私の後ろにほっそりとした人の姿が浮き上がった。

「どうも、久しぶりだね篝ちゃん」

「斑鳩なのか!？」

「一夏もそんな反応してたね。さすが夫婦だね」

斑鳩が笑いながら言うが私の頭には『夫婦』という言葉でいっぱいだった。

「ふ、ふふ、夫婦!？」

「あれ?違うの?」

一夏と夫婦。い、いい!

- - - - - はたまた筭の妄想開始 - - - - -

「ただいま!」

「おかえり、一夏」

玄関に向かい一夏の荷物を持つフリフリのエプロンを着た筭。

「ああ、ただいま筭」

「夕食の用意が出来ているぞ。風呂も沸いているし、どっちにする?」

「そうだな、先になにか食べたいな」

「そうか、分かった。では」

そついい台所に戻ろうとしたがいきなり一夏に腕を捕まれた。

「ど、どうしたんだ、一夏」

「箒、俺は夕食を食べるとはいつてないぜ」

「では、なにを食べるんだ？」

「分かっているだろ。食べたいのは箒。お前だ」

「……!？」

顔を赤くし驚く篤。しかし、心の中ではバッチコーイ!と構えている篤であった。

「黙っているっていうのはいいという意味だよな」

「ま、待て一夏!?!さすがにそ、その、あ、汗をかいているんだ!だから、せめてシャワーを浴びてから」

「もうダメだ!篤!!!」

「キャッ!?!」

篤を押し倒す一夏。その目は腹を空かした狼のようだった。

「一夏」



「いいな？」

見つめ合う一夏と箒。その雰囲気はだんだんと加速していた。

「ああ、いいぞ一夏。私を食べてくれ」

そついい手を広げ向かい入れる体勢をする。

その姿は官能に満ち溢れていた。

「じゃあ、いただきます」

一夏の顔が近づいていった。



## 2 翼（後書き）

どうだったでしょうか？

変なところは、・・・多々あったと思います。

箒ファンのみなさん、箒をこんな風に書いてしまってますみません。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6264y/>

---

インフィニットストラトス 忍ぶ臆病者

2011年11月20日20時04分発行